様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ１４２６０

研究課題名（和文）BEVIを用いた短期留学プログラムの留学効果及び その持続性についての検証

研究課題名（英文）Examining the impacts and their lasting effects of a short-term study abroad program using the BEVI instrument

研究代表者
永井　敦（Nagai, Atsushi）

広島大学・森戸国際高等教育学院・特任助教

研究者番号：００８１４３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国内の高等教育機関で提供されている短期留学プログラムについて、(1)短期留学プログラムは効果があるかどうか、また、(2)短期留学プログラムの効果は持続するかどうかを実証的に明らかにすることを目指した。
　これらの妥当性を検証するため、短期留学プログラム（1学期及びそれ以下の長さ）に参加した8名の学生を留学前後、帰国後6か月、帰国後1年の4時点に渡って調査した。留学効果の測定についてはBEVIという客観的な測定ツールとインタビューを組み合わせた。結果から上記前提の妥当性が支持されたが、(2)については、留学効果は時間とともに減少することも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は国内の多くの高等教育機関で提供されている短期留学プログラムには実際に効果があることを、客観的測定ツールを用いて明らかにした。短期留学プログラムの教育的価値を高め、ステークホルダーへの説明責任を果たす上で重要な知見である。
　また、本研究は短期留学プログラムの効果が、留学から帰国後1年を経ても持続していることを明らかにし、短くてもまずは留学に行くことで肯定的な学習効果が得られることを示した。

研究成果の概要（英文）：This study explored the questions of (i) whether short-term study abroad programs offered at many higher education institutions in Japan have measurable impacts on students and (ii) whether the study abroad impacts last for a prolonged period of time.
　In order to answer these questions, a longitudinal study was conducted that assessed 8 Japanese students' changes at 4 time points (before/after study abroad, 6 months after study abroad, 1 year after study abroad), using a psychological assessment tool called BEVI (Beliefs, Events, and Valued Inventory) as well as individual semi-structured interviews. All the students participated in a short-term study abroad program that lasted for one semester or less. The study found a positive answer to each research question. However, it was also found that the study abroad impacts slowly decrease overtime, indicating a need to provide continued and further educational intervention to keep students' study abroad gains alive.

研究分野：高等教育

キーワード：留学　効果測定　国際教育　BEVI

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、国内の多くの高等教育機関で提供されている短期留学プログラムの効果及びその持続性を調査するものである。2021 年現在は、COVID-19 による影響もあり、国内の高等教育機関における留学プログラムは軒並み停止という状態になっているが、本研究が開始された 2019 年時点には 10 万人を超える日本人学生が留学をしていた（独立行政法人日本学生支援機構, 2021）。しかし、それらの留学生の 80%以上が 6 か月未満の比較的短い留学である。

短期留学を志向する理由は経済的事情や就職活動への影響など様々であろうが、その考え方には、短期留学プログラムであっても、何らかの留学効果が生じるということ、そして、その効果が帰国後も持続していること、の 2 つが前提とされている。それにも関わらず, これらの前提に関して、これまで実証的研究を通じた知見の蓄積が十分になされていない。その理由の 1 つには留学効果の客観的測定を可能にする、信頼性と妥当性の高い測定ツールがそもそも一般に利用可能でなかったことが挙げられる。また、今一つの理由として、留学経験に関する先行研究においては、留学前後の変化を調査する、比較的単純な研究デザインによる調査研究は、文献においても散見されるが、その留学効果が、例えば帰国から半年後、またはそれ以上の期間を経た後にも持続しているかどうかを探る縦断的な研究はほとんどなされていないということがある。なお、これは我が国だけの問題ではなく、世界中の留学効果を研究する分野一般にも言えることであることも指摘しておきたい。

我が国の高等教育機関で提供されている留学プログラムには、近年では官民連携で推進する「トビタテ！留学 JAPAN」や日本学生支援機構の奨学金プログラムなど、政府による日本人の海外留学促進事業という位置づけで、財政的支援を受けているものが多い。したがって、それらの留学プログラムの効果を検証することは、ステークホルダーへの説明責任を果たすためにも非常に重要である。

２．研究の目的

上記の背景をふまえ、本研究では、留学効果の検証及びその持続性の検証を行うため、以下のように 2 つのリサーチクエスチョンを設定した。

(1) 短期留学プログラムは望ましい学生の変容をもたらすか？（留学効果の検証）
(2) 留学生が帰国後、一定時間を経た後も留学効果は持続するか？（留学効果の持続性の検証）

本研究は、上記の 2 つのリサーチクエスチョンに答えることで、これまで無批判に仮定されてきた前提の妥当性を検討するためのデータを得ることを目的としている。

３．研究の方法

本研究ではまず、客観的な留学効果の測定を可能とするため、Beliefs, Events & Values Inventory（以後 BEVI）という、心理尺度を測定のツールとして用いることとした。BEVI は米国 James Madison 大学の臨床心理学者である Craig N. Shealy 博士が中心となって開発した、オンラインで回答可能な心理尺度である。元々英語版のみであったが、現在では日本語版も開発されており、我が国の高等教育機関でも留学プログラムの効果検証を目的として、BEVI の導入を行う機関が増えつつある。BEVI の強みとして、その尺度が、しっかりとした心理学的根拠を背景に開発されているため、その妥当性が高く、また、多数のサンプルを元に改良を重ねられてきたことで、尺度としての信頼性も十分であることが挙げられる。BEVI は人間の変容を多様な側面から理解するための 17 の領域（スケール）及びそれらを測定する質問項目から構成されており、回答結果を 0～100 の量的な数値（標準化されたパーセンタイルスコア）で表示する。

次の、研究の対象として、日本国内の高等教育機関で提供されている、短期留学プログラムに参加する日本人学生を選定した。ここでの「短期留学プログラム」は一学期相当の留学（4 か月）またはそれ以下の期間で実施される留学プログラムとしている。留学先は東南アジア（タイ及びベトナム）であり、学生は学部生及び大学院生の合計 8 名である。

縦断的な研究デザインとして、量的尺度である BEVI を（i）留学前、（ii）帰国直後、（iii）帰国後 6 か月、（iv）帰国 1 年、の 4 時点で実施し、（ii）から（iv）の 3 時点については、研究協力者に個別にインタビューを実施して、質的な面からも現象の理解を試みた。

４．研究成果

上で述べたように、BEVI は複数のスケールから構成されるが、本研究では、その中で、留学の分野で伝統的に主要な留学効果とされてきた「異文化理解」に関わる 2 つのスケールに焦点を当てる。それらのスケールは BEVI では Sociocultural Openness（社会文化的オープンさ）と Global Resonance（世界との共鳴）と呼ばれている。まず Sociocultural Openness のデータを

以下に提示する。

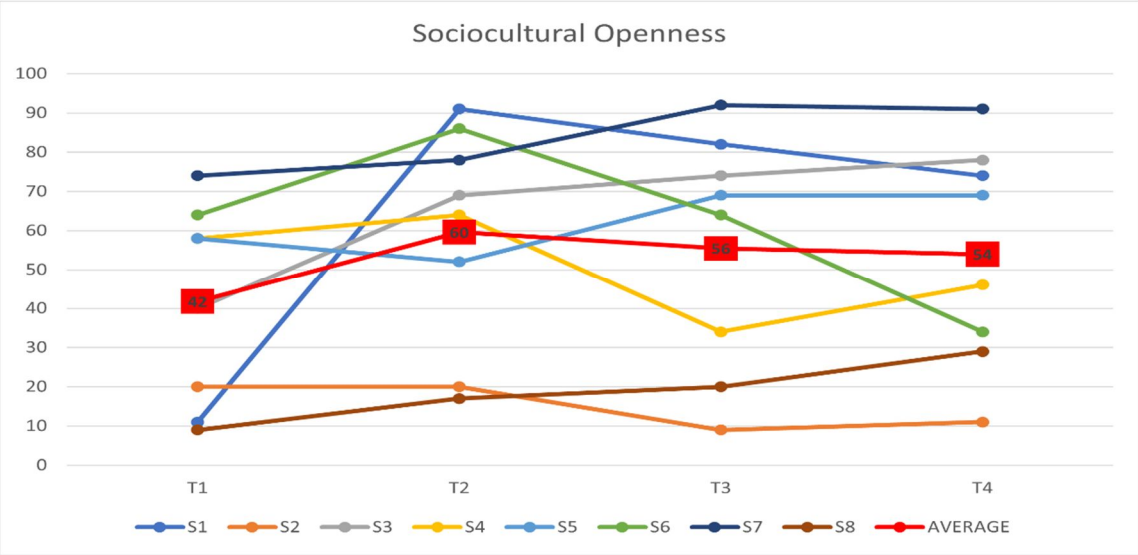

図 1 Sociocultural Openness における変化（4 時点）
[T1:留学前　T2:帰国直後　T3:帰国後 6 か月　T4: 帰国後 1 年]

図 1 は調査対象学生 8 名（S1 ～S8）の 4 時点でのデータを折れ線グラフで表示したものである。個別学生の変化の軌跡は様々であるが、赤色のグラフは全学生のデータの平均である。この平均を表すグラフには、平均されたスケールスコアの値も併せて表示されている。ここで、個別学生の変化に関する細かな情報を平均化することへの異論もあるだろうが、実務の視点から言えば、留学プログラムの効果についてステークホルダーに報告する際には、通常は平均された数値が用いられるため（例えば 100 名の留学生の個別データを報告することは口頭でもレポートでも不可能であり、非効率である）、こちらの方が実態に即しており、問題無いと判断した。

さて、まず平均のデータについて T1 と T2 を比較するとスコアが向上していることがわかる。これがこのデータにおける留学効果であり、Sociocultural Openness が異文化理解と近い概念であることから、留学プログラムを通じて期待されていた、望ましい変化を得られたと言える。BEVI という客観的測定ツールにおいても、短期留学プログラムの留学効果が観察されたことは意義がある。さらに、従来の調査と異なり、本研究は帰国後の留学効果の持続性を T3 と T4 時点において継続調査している点が特徴であった。データからは、時間を経るにつれて若干のスコアの低下は見られるが、全体的には安定傾向にあることがわかる。また、T4 の時点でのスコアが T1、つまり留学前のスコアよりも高いことは重要である。帰国後は当然留学時と比べても異文化経験を得る機会は限られており、また、言語や文化の点で同質性が高いとされている日本で日々生活を送っていることを考えると、この安定傾向はむしろ、留学効果の頑健性を示すとも考えられる。

個別学生のデータを分析すると、S1、S2、S4、S6、S7 の 5 名が T2 時点以降、スコアの低下を示している（特に S6 のスコア低下傾向は顕著である）が、S3、S5、S8 についてはスコアが上昇している。個別のインタビューを通じた分析で分かったことは、学生たちはおおむね留学経験をどの時点であっても肯定的に捉えていた。帰国後のスコアの変化と相関していると思われる点は、帰国後に日常的に異文化経験を行う場があったかどうかという点である。帰国後もスコアが伸びている学生達は、所属の研究室において日常的に留学生との交流があったと報告していたが、他の学生たちはそのような交流については言及していなかった。

図 2 も同様に調査対象学生 8 名（S1 ～S8）の 4 時点でのデータを折れ線グラフで表示したものである。赤色のグラフは全学生のデータの平均である。

平均のデータについて T1 と T2 を比較すると、図 1 と同様にスケールスコアの上昇がある。つまり留学効果で、Global Resonance がグローバル意識（グローバル人材に求められる感覚）と近い概念であることから、これについても留学プログラムを通じて期待されていた、望ましい変化を得られたと言える。T3 と T4 のデータからは、図 1 と同様に時間を経るにつれてスコアの低下が見られるが、その傾向は緩やかであり、T4 のスコアが T1 のスコアよりも依然高いことは重要である。

個別学生のデータを分析すると、S1、S2、S4、S6 の 4 名が T2 時点以降、スコアの低下を示している（特に S6 のスコア低下傾向は顕著である）が、それ以外の学生についてはスコアが T4 時では T2 と同等かそれよりも高い。個別のインタビューを通じ、やはり帰国後に日常的に異文化経験を行う場があった学生は、グローバルな意識を発達させやすい傾向があることが分かった。学生ごとにデータを見ると、Sociocultural Openness と Global Resonance のスコアの振る舞いが似ていることがわかる。またいずれのスケールでもスコアが時間を経て大幅に減少した S6 はやや例外的な学生であることもデータから読み取れる。

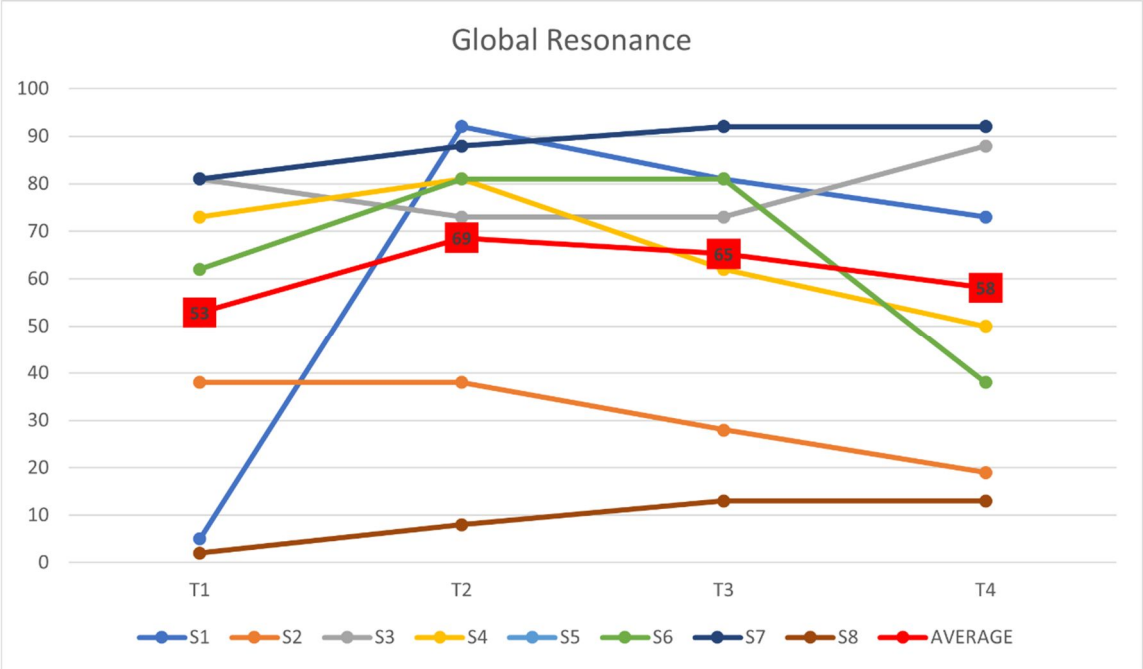

図 2 Global Resonance における変化（4 時点）
[T1:留学前　T2:帰国直後　T3:帰国後 6 か月　T4: 帰国後 1 年]

以上のデータをふまえると、本研究の 1 つ目のリサーチクエスチョン（留学効果の検証）に対しては、肯定的に答えることができる。すなわち、短期の留学プログラムであっても、留学（学習）効果はあるということが、客観的測定ツールである BEVI を通じて明らかにされた。次に 2 つ目のリサーチクエスチョン（留学効果の持続性の検証）についても肯定的に答えられつつも、時間が経過することで、留学効果がゆるやかに減少していくことが分かった。ただし、帰国後に 1 年程度が経過しても、留学を通じて高まった異文化理解やグローバル意識は、留学前のそれらの態度レベルと比べても高いことが分かる。これは留学に行くことの価値を示すものと言えるだろう。また、個別の学生のスケールスコアの変化傾向を分析し、また、個別のインタビューの分析を通じて示唆されたことは、学生の留学効果を保持し、帰国後に、さらに高めるためには、留学後にも継続的に異文化接触の機会を確保することが重要だということである。今後の研究課題として、帰国後の教育的介入をいかに行うかについて検討する必要がある。

本研究は、従来の研究で見過ごされてきた、留学効果及びその持続性の検証について、客観的測定ツールである BEVI を用いて縦断的な研究を行った。得られた知見はこれまでの留学教育の意義を再確認するものであると同時に、留学教育関係者にとって、帰国学生への教育的介入の必要性を示すものである。BEVI も複数存在する客観的測定ツールの一つであるため、例えば、別の心理尺度を用いた効果検証と縦断的研究を通じた追試が求められる。そして帰国後の学生への教育的介入についても研究の発展を期待したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 永井敦	４．巻 24
２．論文標題 BEVIの背景理論（III）：EIモデルにおける「EI自己」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 広島大学留学生教育	６．最初と最後の頁 19，31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井敦	４．巻 2
２．論文標題 BEVIの背景理論（II）：EIモデルにおける「欲求」と「自己」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 広島大学森戸国際高等教育学院紀要	６．最初と最後の頁 15，24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井敦	４．巻 23
２．論文標題 BEVIの背景理論（I）：EI モデルにおける「信念」と「価値観」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 広島大学留学生教育	６．最初と最後の頁 9，19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Atsushi Nagai
２．発表標題 Exploring the Impacts of Study Abroad on Japanese Students' Beliefs and Values: What can the BEVI instrument tell us about their psychological changes?
３．学会等名 日本比較教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Nagai
２．発表標題 A mixed methods case study of Japanese language learners’ change in beliefs, values and motivation
３．学会等名 Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関